手足網縵相の意味

——ブッダゴーサ註釈と北伝資料の相違——

勝　本　華　蓮

1. はじめに

手足網縵[1]は，偉大な人にある身体的特徴，いわゆる三十二大人相（丈夫相）の一つである．北伝では，それを手足の指の間に鳥の水かきのようなものがあると考えるが，南伝のパーリ註釈書はその説を否定し，全く別の解釈をしている．

手足網縵と水かきをめぐっては，1930年前後に印欧の学者によって論じられ，水かきは仏像の影響によるものとされた．しかし，漢訳の調査はまだ不十分であり，わが国においても三十二相の個別相の研究はほとんど進んでいない[2]．

そこで本稿では，手足網縵相に絞って，南伝と北伝における特徴を明らかにした上で，水かき説が何により何時ごろ定着したのか，考察してみたい．

2. 手足網縵相とは

2.1. 南伝パーリ註釈における手足網縵

三十二相は，ニカーヤではDN14（*Mahāpadāna-Suttanta*）とDN30（*Lakkhaṇa-Sº*）とMN91（*Brahmāyu-Sutta*）に説かれるが[3]，手足網縵の原語はどれもjāla-hatthapādo（手足に網がある）である．この語について，ブッダゴーサは註釈書（Aṭṭhakathā=A）の中でこう説明する．

「手足に網がある」とは，皮膚によって指と指の間がつながった者ではない．なぜなら，そのような**蛇頭のような手をもつ者**は（phaṇahatthako）人間の欠陥に害された（障害）者であるから，出家さえもできない．ところが，偉大な人の四本の手の指と五本の足の指とは〔各々〕一定の量である．それらが一定量であることから，〔その中の〕相が相互に貫通している．そこで，彼の手足は巧みな大工がつくった格子窓のようである．それで「手足に網をもつ」といわれたのである．DA (II, p.446); MA(III, p. 376).

これでもまだわかりにくいが，ここに出る語句を復註（Ṭīkā）が説明している[4]．

「皮膚によって」（cammena）とは，指と指の間にひろがった皮膚で．「指の間がつながっ

ている者」（paṭibaddha-aṅgulantaro）とは，指と指の間がひとつにくっついている者であるが，〔如来は〕そうではない．「一定量である」（ekappamāṇā）とは，長さが等しい量である．「相が」（lakkhaṇaṃ）とは，内側の指の結節（ふし）にある相が．「貫通して」（paṭivijjhitvā）とは，それぞれの結節〔の間〕に同じ区分（長さ）があることによって，指を伸ばしたときでも相互に貫かれたように接触して，〔その相が〕とどまる〔という意味である〕．DṬ (II, p.48)．

以上の註釈から，南伝における網縵相とは，手の4本の指と足の5本の指の長さがそろい，指を伸ばして閉じた状態で，内側（掌，足裏）の指と指の間にできる縦線とふしのところの横線がそろって，網目のように見えるということである．

2.2. 蛇頭のような手

では，「蛇頭のような手」とはどういうものであろう．ブッダゴーサは，そんな手をもつ者は出家できないということを理由に大人相ではないと否定するのだが，その根拠は律蔵の犍度部にある．「蛇頭のような手を持つ者を出家させてはならない[5]」と規定されているからである．それについてブッダゴーサは律の註釈書（VA,V,p.1027）の中でこう説明している．

「蛇頭のような手をもつ者」とは，コウモリの翼のように指がつながっている人である．こういう人を出家させたいなら，〔比丘は，かれの〕指と指の間にあるものを破って，〔指の〕間の皮膚をすべて除去し，安穏にしてから，出家させるべきである．

このVAでは，蛇頭はコウモリの翼に喩えられている．コウモリは飛ぶときに翼を広げ，コブラは鎌首をもたげたときフードを広げるという共通点がある．したがって，蛇頭のような手というのは，指の間に膜状のものがあり，指をひろげると見え，閉じたときは見えないものであろう．

これにより5世紀初めのインド出身のブッダゴーサが，北伝でいうような水かき状の網縵相を知っていたことがわかる．彼はそういう解釈を否定するために「蛇頭のような手」をもち出してきたのであろう．しかし蛇頭のような手をもつ者を出家不可とする規則は，北伝の漢訳律では四分律だけにみられる[6]．したがって，他の部派では水かき説が否定される根拠はないわけである．

2.3. 北伝阿含経典における手足網縵

さて，ここで北伝の方に移ろう．漢訳阿含経典で手足網縵相が出るのは4経ある．DN14に対応する長阿含『大本經』と，DN30対応の中阿含『三十二相經』とMN91対応の中阿含『梵摩經』・四阿含外の『梵摩渝經』である

以上のうち翻訳が最も古いのは『梵摩渝經』（支謙訳，223-253年）である．それ

には「手足合して中に縵あり」（T1 p.883c）と出る．縵の意味は，漢和辞典に，①無地の絹，②模様のないもの，③ゆるやか，とあるから，おそらく薄い無地の膜のようなものがあるということであろう．膜という語は『僧伽羅刹所集經』（僧伽跋澄訳，384年）だけにみられるが，これは阿含経とはいえない[7]．

説一切有部所属の中阿含経の『三十二相經』と『梵摩經』（曇摩難提訳 384-391年）は，どちらも「手足の網縵，猶ほし鴈王の如し」（T1 pp.5b; 493c）とある．そして，法蔵部の長阿含『大本經』（仏陀耶舎・竺佛念訳 412-413年）は「手足の網縵，猶ほし鵝王の如し」（T1 p.686b）とある．鴈と鵝の原語はともに“haṃsa”（鵞鳥）である（以下，共に鵝王と呼ぶ）．しかし，これだけでは鵝王とどこがどう似ているのかわからない．鵝王を比喩にあげる文献を見ていこう．

2.4. 鵝王の比喩のある文献

鵝王を比喩にあげる文献は，上記経典以外に17ある[8]．部派の文献は有部の『大毘婆沙論』だけで[9]，他はすべて大乗の文献である．ただし，大乗経典は鵝王の語が出るだけで，具体的に説明するのは註釈書の『大智度論』と『十住毘婆沙論』だけである．漢訳順に見ていこう．

『大智度論』（龍樹作？・羅什訳）ではこう述べる[10]．

> 五には，手足指の縵網相なり，鵝王の指を張れば則ち現はれ，張らざれば則ち現はれざるが如し．（T25 p.90b）

これによると，鵝王のような相とは，指を開けば現われ，閉じれば見えなくなる，つまり鳥の水かきのようなものである．ところがこれは大乗の説ではない．というのは，三十二相をすべて説明したあとで，「摩訶迦旃延尼子[11]の弟子輩の菩薩相義に説くが如し」（T25, p.91c）と出るからである．つまり，これは有部説の引用なのである．『大毘婆沙論』（玄奘訳）を見てみよう．

> 六には手足網縵相．謂く，佛の手足の指間には皆網縵有りて，猶ほし鵝王の指の如し．若し合する時は網即ち現れざるも，而も皺緩無く，開する時は便ち現じて而も攣急無し．（T27 p.888a）

これと『大智度論』の引用文とを比べると，指を閉じてもしわがなく，開いても引きつれはないという特徴が多いが，内容に大差はない．

次に，『十住毘婆沙論』（龍樹作・羅什訳）をみると，これもまた「阿毘曇三十二相品の中に」と明記し（同名の章は現存しない），部派の説を引用する．

> 網縵は軟薄にして猶ほし鵝王の如く，畫文は明了にして眞金の縷の如し．故に手足網相と名づく．（T26 p.65a）

すなわち，網縵とは柔らかくて薄い水かき状のものであり，そこに金色の細い糸のような線（模様）がはっきりと出ているということのようである．

これと似た内容は『大般若波羅蜜經』（玄奘訳）にも出る．

如来の手足の一一の指間は，猶ほ鴈王の如く咸く鞔網有りて，金色交絡の文綺畫に同ず．（T6, p.960b）Cf. T7, pp.376b; 726a; 960b[12]

指の間に鞔網（鞔の意味が不明だがおそらく水かき状のもの）があり，そこに金色の線が規則的に交わって網の目のように見えるということである．

以上から，北伝の註釈書では，手足縵網は，指の間に鳥の水かきのような膜があり，そこに金色の網目模様があると解釈されていることがわかる．

では，このような水かき説を最初に言い出したのはどこであろう．

3. 水かき説の起源

3.1.『大智度論』の立場

『大智度論』が手足網縵相に言及するのは，上記の鵝王の出る文以外に，5ヶ所ある．そのうち註釈対象の『摩訶般若波羅蜜経』からの引用は1ヶ所だけで[13]，残り4のうち3つまでが他説の引用である．例えば，阿私陀仙の予言の所では，

指合縵網は……是の如き等は阿毘曇の中に廣く分別するが如し（T25, p.219c）．

とあり，また，手足縵網相を得る原因については，

有人は言ふ，…施は人を攝するが故に，手足縵網相を得．（T25, p.141b）．

四攝法を以て衆生を攝する業因縁の故に，手足縵網相を得．…是を声聞法を用ふる三十二相の業因縁と為す．（T25, p.273c）．

と述べる．前者は施，後者は四摂法という違いがあるが，四摂法の最初は施であるから[14]，「有人」も「声聞法」の人，すなわち部派である可能性は高い．

また，残る1ヶ所（T25, p.684a）の内容は，罽賓國彌帝隸力利菩薩には縵網相があったが，彼の父親がそれを奇怪なものと嫌って割いてしまった．衆生には好みがあり，仏は天竺國の人の好みに随って三十二相を現わしたというものである．

このように，『大智度論』は手足縵網相を重視していないのである[15]．また，三十二相をそなえた者は菩薩であるという説を[16]，こう弾じる（T25, p.273a）．

迦栴延子の阿毘曇鞞婆沙の中に是の如き説あり，三藏中の諸説に非ず．なんとなれば，三十二相は餘人にも亦た有り，何ぞ貴しと為すに足らんや．

これは，三十二相は菩薩以外の人にもあるから，それほど貴いものとするに値しないという主張である．逆にいうと，三十二相を貴ぶのは有部なのである．

以上で，水かき説の起源は大乗ではなく，有部の可能性が高いことが確かめられたと思う．しかし，有部以外の部派も調べてみる必要がある．

3.2. 部派の文献中のハンサ

手足網縵が出る部派の文献を，梵本と漢訳から確認していこう．

『大本経』には梵本 *Mahāvadāna-sūtra* が発見されているが[17]，これは有部の所伝のアーガマである．その中，王子（菩薩）にある三十二相を告げる場面で，「手足にある網は美しいハンサ王（haṃsa-rāja）のようです」と語られる．

そして，所属部派不明の *Lalitavistara* には jāla-aṅgulihastapādaḥ（手足の指が網である）とあり，その対応漢訳『普曜經』『方廣大莊嚴經』も網縵・網鞔と出るのみで，鳥の譬喩はない．大衆部の *Mahāvastu* には jāla-avanaddha とある．avanaddha は √nah の過去分詞で，「縛られた，結ばれた，覆われた」の意味があり，『摩訶僧祇律』には「合縵網文成」と出る．これでは水かき状のものとは確定できない．

根本説一切有部の『毘奈耶破僧事』には「網縵」としか出ないが[18]，*Saṃghabhedavastu* は有部の *Mahāvadāna-sūtra* と類似の内容を説き，ハンサ王（**haṃsarāja**）の譬喩がある[19]．

つまり，現存資料に限れば，部派の文献で梵本にハンサの喩えが出るのは，有部・根本有部だけである[20]．そして，漢訳では上記（有部の中阿含・大毘婆沙論と，法蔵部の長阿含）以外に，鳥の喩えが出るものはない．つまり，梵漢とも共通して鳥の喩えが出るのは，有部だけなのである．

なお，法蔵部長阿含の「鵝王」の語は訳者の付加の可能性もある[21]．

3.3. 仏像の影響

最後に，仏像の影響説について考えてみたい．これは5世紀（グプタ朝）に彫刻者が仏像の指の破損予防として指の間を彫り残したものを，後代の学者が誤って解釈し，縵網が水かきとして三十二相に加わったとする説で，クマラスワーミが提唱した[22]．日本の学者もガンダーラ仏の網縵相への影響を考えている[23]．

しかし，筆者はすでにクシャン朝（3世紀）のマトゥラーの仏像に，親指と人差し指の間に網目模様が刻まれている資料をみつけた（写真は註24の図録より）[24]．

単に手の破損を防ぐためなら，そのような形状にならないはずである．言葉は抽象的でよいが，物体ではそうはいかない．おそらく仏像制作の際に，形を具象的に考える必要に迫られ，ハンサ王のような網目のある水かき状のものが考えられ，その考えをもとに表現したのではなかろうか．つまり，仏像が先なのではなく，その逆と考えるのである．ここで，マトゥラーは有部が勢力をもっていた地

仏坐像（サヘート・マヘート出土）

仏上半身像（マトゥラー出土）

域であることは注目すべきであろう．

4. おわりに

以上をまとめる．手足縵網相は，南伝では「手足〔の指〕が網のように〔長さがそろっている〕」という意味であるが，北伝では「手足〔の指〕が鵞鳥の王のように〔つながって〕網目がある」と考えた．後者のような解釈の起源は有部と考えられる．その根拠は，①有部所伝の梵漢阿含経にハンサ王の喩えがあること，②大乗初期の『大智度論』が有部説を引用していること．③3世紀頃，有部が勢力をもっていたマトゥラーに網目の水かきをもつ仏像が存在することである．

---

1)　縵網という訳もある．　2)　三十二相の配列による文献系統の解明が主である．高田信一「Mahāvastu 所伝「仏の三十二相」について」『佛教研究』2, 1972, pp.99-99. 岡田行弘「三十二大人相の成立」『勝呂信静博士古希記念論集』1996, pp. 71-86（同氏の一連の研究はこの註を参照）．関稔「釈尊観の一断面—三十二相を中心として—」『日本仏教学会年報』50, 1985, pp.47-60. 中村元『新編ブッダの世界』学習研究社 , 2000, p.486 はブッダゴーサ註釈に言及．　3)　DN, II, p.17; III. pp.143; 153; MN, II, p. 136.　4)　DA と DṬ とを比べると，数ヶ所相違があり，DṬ は異読が多い．　5)　Na bhikkhave phaṇahatthako pabbājetabbo. Vin(I, p.91).　6)　T22, p. 814b（林隆嗣氏の質問により調査）．
7)　指間連膜（T4, p.128b）．中印度出身の Saṃgharakṣa が3世紀頃ガンダーラに来て著述した．　8)　以下漢訳年順．①大智度論，②十住毘婆沙論，③禪祕要法經（T15, p.255b），涅槃經④北本⑥南本（T12, pp.535a; 780a 同文），⑤金光明經（T16, p.344a），⑦究竟一乘宝性論（T31, pp.817c; 844b），⑧勝天王般若經（T8, p.723a），⑨大乗同性經（T16, p.649a），⑩合部金光明經（T16, p.385b），⑪金光明最勝王經（T16, 432a），⑫大般若波羅

蜜經（T7, p. 960b），⑬大毘婆沙論，⑭證契大乘經（T16, 660c），⑮華嚴經（T10, p.703a），⑯衆許摩訶帝經（T3, p.940b），密跡金剛經（T12, p.1117a，失訳）．該当箇所の梵本があるのは⑦⑪⑫⑮で，⑦⑫はハンサの比喩なし．⑪ *Suvarṇa-prabhāsa-sūtra* には haṃsendra の語（Nanjo ed. p.91），⑮ *Gaṇḍavyūha* には haṃsarāja の語がある（Vaidya ed. p.309）．

9）婆沙論三訳で三十二相を詳説するのは玄奘訳のみ．　10）被註釈経の『摩訶般若波羅蜜經』に鵝王の句はない．　11）有部『発智論』の著者カーティヤーヤニープトラのこと．　12）『大般若波羅蜜經』は諸般若経の集成なので，ほぼ同内容が4回出る．　13）手足指合縵網妙好勝於餘人（T8, p.395c）→手足指合縵網勝於餘人（T25,p.681a）．　14）布施・愛語・利益・同事のこと．『十住毘婆沙論』にも「常修四攝法布施愛語利益同事故，得手足網縵相」（T26. 65b）と出る．　15）「世諦故説三十二相．第一義諦故説無相」（T25 p.274a）他．　16）三十二相を得る業（相異熟業）を得たら菩薩となる．詳しくは，拙論「菩薩になる条件と祈願―南伝と北伝の比較―」『日本佛教学会年報』70, 2005（出版予定）．　17）*The Mahāvadānasūtra: A New Edition Based on Manuscripts Discovered in Northern Turkesten*, ed. by T. Fukita, 2003, Güttingen, 2003, p.78.　18）T24, p.109a. 根本有部律は他に T23, pp.859b; 885c; 994a; T24, p.40b.　19）同部派の説話 *Divyāvadāna*（E. B. Cowell ed., p.56）には jāla-avanaddha の語．　20）両者を同一部派とする説は，榎本文雄「「根本説一切有部」の登場」『神子上恵生教授頌寿記念論集』2004, pp.651-677.

21）仏陀耶舎は有部の本拠地の一つカシミール出身で，中国に来て羅什に『十住毘婆沙論』を口頌した後，長阿含を漢訳した．すでに漢訳中阿含はあった．22）A. K. Coomaraswamy, "The webbed finger of Buddha," IHQ, VII, 1931, pp.365-366. É. Lamotte, *Le Traité de la Grande Vertu de Sagess*, I, Louvain, 1981, pp. 273-274 によれば，E. Burnouf, *Le Lotus de la Bonne Loi*, 1ed., 1852, p.574 で jāla が膜を意味しないと言い，M.A. Foucher は手の筋だと解した．1930 年頃議論が盛んになり，J.N. Banerjea や M.W.F. Stutterheim は手の血管の模様と論じた．筆者が確認したところ，Banerjea はブッダゴーサ解釈にも言及している．また Lamotte は漢訳の出典も挙げている（全部ではない）．　23）高田修『佛像の起源』，岩波書店，1967, pp.239; 339; 367-368．彼は，マトゥラーの仏像で手と胸の間に枕状の支え（筆者註：これは Banerjea も IHQ, VI, p.720 で指摘）を残した手法から網縵相が考え出され，ガンダーラに伝わったと推測する．また，指に膜がある相はガンダーラでも早期にはなく，マトゥラーに作例は見られないという．次註参照．　24）『インド・マトゥラー彫刻展』，東京国立博物館・NHK，2002, pp.32-33, No.16（マトゥラー出土仏上半身像，マトゥラー博物館），No.17（サヘート・マヘート出土仏坐像，ラクナウ州立博物館）．No.17 は解説には 2-3 世紀の作とある．しかし高田はこの像を唯一の例外とし，その制作は遅いと見る（前掲書，pp.367-368）．No.16 像への言及はない．（Pali Text Society 版使用，略号は通例に従った）

〈キーワード〉 jālahatthapādo，鵝王，三十二相，説一切有部，マトゥラー

（花園大学非常勤講師）

There is the statement in the *Abhidharma Mahāvibhāṣā* (AMBh) translated by Xuanzang 玄奘 that discrimination in meditation is devoid of conceptual construction (*nirvikalpaka*), but that language exists until the first stage of meditation (*prathamadhyāna*). Dharmakīrti (ca.600-660) calls cognition (*jñāna*) that can combine with language conceptual construction (*kalpanājñāna*). This may be understood to mean that there is no language in meditation. On the contrary, it is said that language exists until the first stage of meditation in the AMBh. The authors of the AMBh regard cognition that is combined with language in the first stage of meditation as non-discriminative (*nirvikalpaka*), because they say that discrimination in meditation is devoid of conceptual construction.

70. The Meaning of *Jāla-hatthapāda*: The Difference between the Southern and Northern Traditions

Karen KASTUMOTO

Jāla-hatthapāda is one of the thirty-two characteristics of a great man like the Buddha. In Northern Buddhism, it implies that He had membranes/webs between the digits of His hands and feet.

However, Buddhaghosa's commentaries refute this idea. Buddhaghosa argues that under the rule of the *Vinaya*, such a man cannot become even a monk. Moreover, the commentaries explain that the lines formed by the digits and their knots in the great man appear like nets.

Some scholars argued this matter and concluded that the idea of webbed digits emanated from a misinterpretation of the sculptures of the Buddha, whose digits were connected by sculptors to prevent them from fracturing.

In this paper, I attempt to demonstrate that the idea of webbed digits originates from the Sarvāstivāda school. The evidence is as follows. The word "*haṃsa-rāja*" (the king of ganders) appears as a simile of *jālinī-pāṇipāda* (= *jāla-hatthapāda*) in a Sanskrit scripture, namely, the *Mahāvadana-sūtra*, and in the Chinese versions of other sutras; all of these were disseminated by the same school. Moreover, I found pictures of two sculptures with webbed dig-

its, probably carved between the 2nd and 3rd centuries in Mathurā, where the Sarvāstivāda school was influential.

71. The Newari Buddhist Manuscripts copied by Ratnamuni Vajrācārya in Lhasa, Tibet

Kazumi YOSHIZAKI

The Asha Archives (Asha Saphu Kuthi) in Nepal has a collection of Sanskrit and Newari manuscripts about 5,300 in number. In this collection, according to the colophons, I discovered 37 mss. commissioned by Newari traders or artisans who had lived in Tibet (Yoshizaki, "The Modern Newari Buddhist Manuscripts copied in Tibet — from the Collection of Asha Saphu Kuthi, Kathmandu, Nepal," forthcoming). Of these mss., 6 or 7 mss. were copied by Ratnamuni Vajrācārya in Lhasa. In the first half of his life he was a priest of Sikhamu Bahā (Tarumūla Mahāvihāra) of Kathmandu, and he copied 2 mss. dated Newari Saṃvat 983 and 991. But in his later life, between Newari Saṃvat 991 and 1001, he proceeded to Lhasa to engage in the business of trade with Tibet. And at least for 12 years he stayed in Lhasa, keeping his habit of copying Buddhist mss. as in the Kathmandu days. Then it seems that later in Lhasa he changed his position from businessman to priest for the Newari merchants in Lhasa (Yoshizaki, "The Vajrācāryas in the Newari Merchant Associations in Tibet [Pālās]," forthcoming). He was one of the typical men who intended to maintain the Newari culture in Tibet.

72. The Traditions Related to the Parinibbāna of Sāriputta

Shōgo IWAI

In the Nikāyas and the Chinese Āgamas it is a fixed tradition that Sāriputta and Mahāmoggallāna, the two great disciples of Sakyamuni, entered parinibbāna earlier than their Teacher. But it is not clear how long before the Teacher's parinibbāna this took place. For example, according to the Pali tradition, Sāriputta actually appears in the *Mahāparinibbānasuttanta*; therefore